第69回日本臨床眼科学会 モーニングセミナー 5

レーザーフレア セルフォトメトリー, Now!

2015年10月23日(金) 7:45〜8:45

第12会場 (名古屋国際会議場 2号館1F 展示室211+212)

座 長

三宅 謙作 先生

医療法人 湘山会 眼科三宅病院 理事長

レーザーフレアセルフォトメトリー(LFCM)は1988年に興和株式会社と自治医科大学の澤充講師(当時)らのグループによって世界初の血液房水柵破壊の定量的、非侵襲的方法として登場した。以来いくつかの改良が加えられ、FC-1000から現在のFM-600、FM-700等の機種に発展してきた。

LFCMは白内障/眼内レンズ手術などの術後炎症の定量、分析に最も広く使用された。特に我が国では白内障/眼内レンズ手術の術後炎症のメカニズムが詳細に検討され、NSAIDs点眼の効果、交感性反応、IOL固定法を中心に広範囲に使用された。LFCMは各種ぶどう膜炎、偽落屑症候群、メラノーム等の疾患の進行、分析にも使用され、さらには加齢黄斑変性、静脈閉塞症、糖尿病網膜症等、後眼部疾患の房水柵に対する影響についても興味深い知見を提供した。

今日、特に白内障/眼内レンズ手術を中心にその低侵襲化が進み、一見術後炎症は低減したように見られ、LFCMの不要論も囁かれる。しかしながら手術の進歩に伴い、新しいデバイスが登場するし、関連して投与される薬物も変化する。これらの評価や副作用を房水柵破壊を指標として検討することによる知見は今までも存在したし、さらに今後も継続する。さらに新しい問題としてOCT等の画像診断の進歩により前眼部、後眼部に関する新所見が報告され、LFCMの知見との組み合わせで、新しい発見にもつながる。

いずれにしろ、低侵襲で定量性のある本機種は、臨床的に得られた所見を眼の生理学あるいは解剖学に結び付け考察することによって、疾患に対する新しい見方を提供してくれるものとして今後とも重要な臨床用具であると考える。

演 者

白内障/IOL手術とフレア値

太田 一郎 先生

医療法人 湘山会
眼科三宅病院 院長

原田病におけるフレア値と炎症遷延

丸山 和一 先生

東北大学大学院医学系研究科
神経・感覚器病態学講座 眼科学分野 講師

共催 第69回日本臨床眼科学会
興和株式會社